

# 平成 30 年度「丹後織物業の景況・動向調査」報告書

調査対象	丹後地区内の織物事業者：169 事業者（「丹後織物工業組合」に加入する親機事業者）	
調査期間	平成 30 年 12 月～平成 31 年 2 月	
調査方法	アンケート調査	対象：169 事業者 ⇒ 回答：81 事業者(回答率:47.9%)
	聞き取り調査	訪問：7 事業者(白生地 2、帯地 2、その他 2)
回答者の属性	市町別	*京丹後市:52% *与謝野町:48%
	生産品目別	*白生地:41% *帯地:33% *その他(服地、小物、その他):26%
	年代別	*40 歳代以下:9% *50～60 歳代:52% *70 歳代以上:39%

[平成 31 年 3 月：公益財団法人 京都産業 21 北部支援センター]

## 《はじめに》

- (公財)京都産業 21 北部支援センターでは、丹後地域織物業の景況や動向を把握し、関係機関等の参考としていただくため、平成 30 年 12 月から平成 31 年 2 月にかけて「アンケート調査」と「聞き取り調査」を行いました。
- 丹後産地の平成 30 年白生地生産量は 28.2 万反、前年比 4.2%の減少となる中、今回の「アンケート調査」でも D I 値は調査開始(H26)以降 5 年連続のマイナスとなりましたが、その値は最小(-15)にとどまりました。
- これら「アンケート調査」結果を補完・考察するための「聞き取り調査」を併せて、「景況・動向」と「丹後産地の展望・課題」の 2 部構成で、平成 30 年度「丹後織物業の景況・動向調査」報告書としてまとめました。

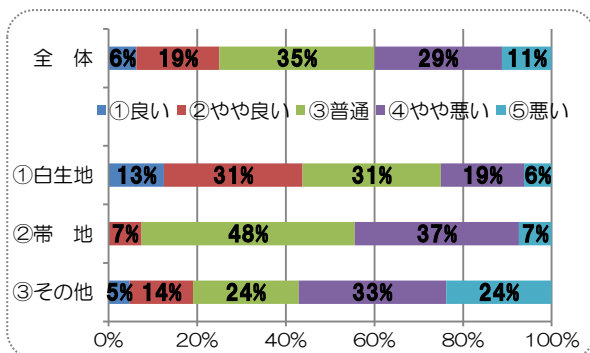
## 《第 1 部：景況・動向》

### 【アンケート結果】

#### 1 平成 30 年の景況感

=D I 値、白生地で初のプラス値=

- 平成 30 年の景況感は、全体で「良い」と「やや良い」を合わせて 25%(前年比+4PT)、「やや悪い」と「悪い」を合わせて 40%(前年比-3PT)となった。その結果 D I 値は-15 となり、本調査開始(H26)以降最小であった前年値(-22)と比して、更にマイナス幅が縮小した。
- 生産品目別に D I 値を見ると、白生地では調査開始以降初めてのプラス値(+19)となった。一方、帯地は-37、その他(服地、小物、ネクタイ地等)は-38 となり、白生地と比して顕著な相違が生じた。また、白生地と帯地では「普通」以上が半数を超えたが、その他では約 4 割にとどまった。

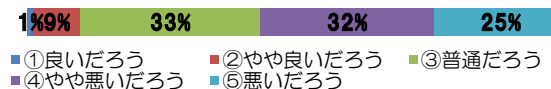


#### 2 平成 31 年の景況見通し

=半数以上が悪化の見通し=

- 景況見通しについては、全体で「良い」と「やや良い」を合わせて 10%、「やや悪い」と「悪い」

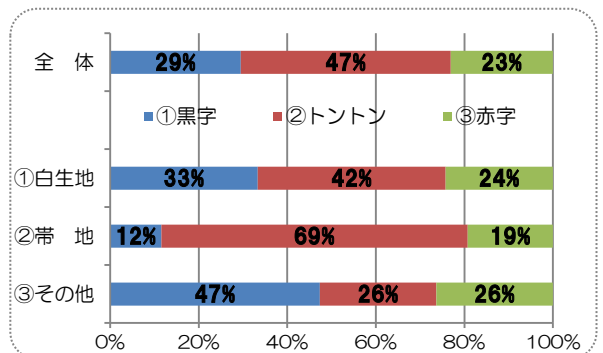
を合わせると 57%と半数を超え、D I 値は-47 となった。平成 30 年の D I 値(-15)と比較すると、悪化の見通しが顕著に表れた。



#### 3 平成 30 年の採算状況

=初めて、黒字が赤字を上回る=

- 採算状況は、全体で「黒字」が 29%(前年比-1PT)、「トントン」が 47%(前年比+10PT)、「赤字」は 23%(前年比-10PT)。調査開始以降初めて、黒字が赤字を上回った。
- 生産品目別に「黒字」の比率を見ると、その他 47%、白生地 33%、帯地 12%の順。「トントン」では、その逆に帯地 69%、白生地 42%、その他 26%の順となり、それぞれ差異が生じた。一方、「赤字」比率では、大きな差異は見られなかった。



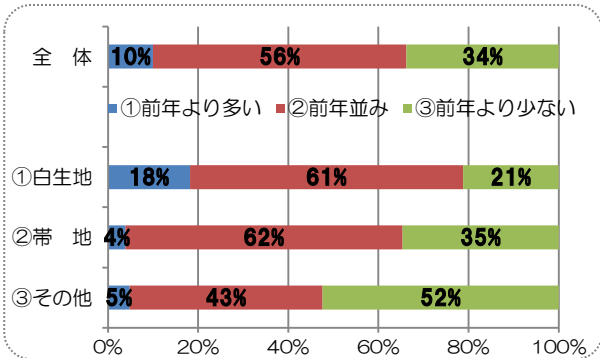
#### 4 平成 30 年の生産受注

=「前年並み」以上 2/3、白生地好調=

- 生産・受注量は、全体で「前年より多い」が 10%

(前年比-7PT)、「前年並み」が56%(前年比+7PT)、「前年より少ない」が34%(前年比+1PT)となった。「前年より多い」と「前年並み」を合わせた割合(2/3)と「前年より少ない」の割合(1/3)は、前年結果と同じであった。

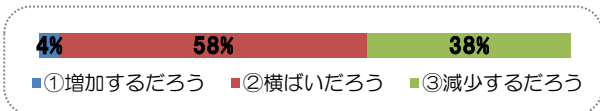
- 生産品目別では、「前年より多い」と「前年並み」を合わせた割合が、白生地79%、帯地66%、その他48%の順となり、「景況感」と同様に白生地分野の好調傾向が表れた。



## 5 平成31年の生産受注見通し

=「増加」「横ばい」合わせて6割=

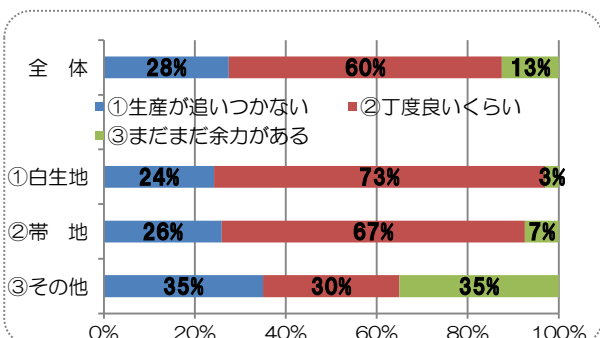
- 生産・受注見通しについては、全体で「増加」が4%(前年比-7PT)、「横ばい」が58%(前年比+11PT)、「減少」が38%(前年比-4PT)となり、平成30年結果と大きな差異は見られなかった。
- 生産品目別の差異については、ほとんど表れなかった。(※「生産品目別グラフ」省略)



## 6 受注と生産のバランス

=白生地、帯地とも「余力あり」は僅か=

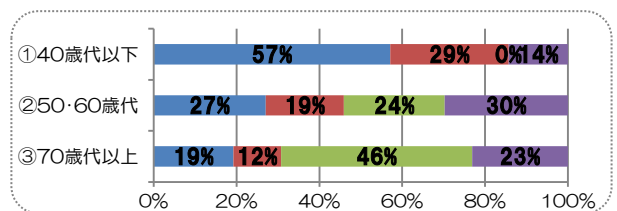
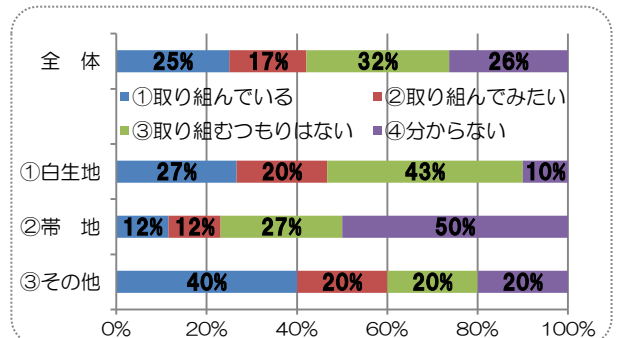
- 今回の調査で初めて、ここ1~2年の「受注と生産バランス」を聞いた。全体では、「生産が追いつかない」が28%、「丁度良いくらい」が60%となり、「まだまだ余力がある」は13%にとどまった。
- 生産品目別では、白生地、帯地とも9割以上が「生産が追いつかない」または「丁度良いくらい」と答え、「まだまだ余力がある」は白生地3%、帯地7%にとどまった。一方、小物、服地、ネクタイ地等のその他では、概ね1/3ずつに分かれ、35%が「まだまだ余力がある」と答えた。



## 7 新しい取組への対応

=「若い層」、「白生地」・「小物等」積極的=

- 新商品・最終製品の製作、新販路の開拓、他分野との連携等「新しい取組への対応」を聞いた。全体では、「取り組んでいる」が25%、「取り組んでみたい」が17%と、積極回答が42%となった。
- 生産品目別の積極回答は、小物等その他が60%、次いで白生地が47%、賃加工が多くを占める帯地では24%であった。
- 年代別の積極回答は、40歳代以下が86%、50~60歳代が46%、70歳代以上が31%となり、若い層の積極姿勢が表れた。



## 【第1部：補完・考察】\*生産者の声から\*

=好況感の要因、産地の生産力低下=

- \*全国和装産地の生産力の低下は、消費力の低下幅を上回るまでになっており、このことで集散地等からの注文や問い合わせが殺到している。
- \*様々なオーダー、ニーズへの対応力や提案力が必要となっているが、総じてこちらの言い値が通るようになってきた。
- \*そうした状況が、今回のアンケート結果、特に「景況感」での「DI値」や「受注と生産のバランス」での「忙しさ」に表れたのだろう。
- \*4年間ほど上がり続けた生糸価格が、昨年(H30)6月頃に天井を打ち、以降下がり傾向。資金的にも価格設定面でもやりやすくなった。
- \*白生地の海外産事情は、中国産が減り、ベトナム産が増加、単価は上昇傾向にある。振袖等の大ロットものが中心だが、これが小ロットに移行してくると国内産に影響が出るかもしれない。

=賃加工の帯地、好況感まで届かず=

- \*アンケート結果で、白生地も帯地も同様に「忙しい状況」が表れたにもかかわらず、帯地では「好況感」として表れなかったのは、「儲かり感」の薄さにあるのだろう。
- \*白生地は、基本的にメーカー。落ちるところまで

落ち込んだときに、出機のほとんどが廃業した。そして、残った受委託者と生き残りをかけて自社工場化してきた者が、「言い値で取引できるようになった」現況に、好調を実感しているのだろう。

- \* 帯地は、基本的に西陣メーカーの下請け。廃業は続くものの、構造的な要因からまだまだ出機が大半を占めている。高齢による技術力の低下、西陣メーカーの諸事情などで「織工賃アップまでつながりにくい」状況に、仕事はあっても好調感までは届かないのであろう。
- \* 和装小物、小物雑貨、各種服地、ネクタイ、金襴等の生地や製品生産においては、生活スタイルや価値観の変化、クールビズ等の潮流の中で、それぞれの生産と取引を展開。そうした中で「善戦健闘だったり、悪戦苦闘だったり」なのであろう。

### =景況の悪化見通しは‘慎重論’？=

- \* 本年(H31)の景況見通しで「悪化方向」が多くを占めたのは、これという確たるものでなく、わが国全体の景気懸念や昨今の善戦状況への反動懸念といった‘慎重論’から生じたものであろう。
- \* 今秋の消費税増税に関しては、ある程度の駆け込み需要とその反動は生じるだろうが、生産者にまで大きな影響を及ぼすことはないであろう。また、そうあることを願いたい。

### =新しい取組‘今は当たり前’、課題は販路=

- \* 小ロットの个性的商品づくり、ちりめん生地を使った新商品づくり、同業者・異業者との連携取組、小売・消費者レベルとの直接取引、海外に目を向けた展開…。新しいと言われた取組も、今では‘当たり前’になってきた。ただし、従来の取引先も、互いの利益のために欠かせない間柄。信用と信頼を第一に、うまく付き合っていく。
- \* 隙間狙いでいろいろなチャレンジをしているが、課題は何と言っても販路の開拓と確保。売れ筋の研究、展示会出展とフォローの積み重ね、互いの信用と将来性を見極め、新取引の成立までは本当に時間がかかる。
- \* 新しい取組は、危機感から生まれてきた面があり、今の「ガツガツしなくても仕事がある」という状況の中、多少気持ちが薄らいでいるものも見られる。地域内の連携展開は、単に「一緒にやる」、「補助金を狙う」でなく、「こうしていきたい」という「同じ気持ち」と「同じ速度」が重要。

### =訪問先7社の経営特徴を紹介します=

- \* 白生地から先染生地へと移行途上。十日町、京都の集散問屋との取引を中心に、難しい注文にも応えてくれる出機と100台規模でやっている。互いの採算分岐点とこちらの言い値を併せながら、「損まではいかずに、何とか食べているかな」。
- \* 近年、最後の出機廃業で完全内製化。家族と雇用の20人で30台規模、小ロット・オリジナルものを中心に動かしている。白6割、先染4割の生産

に対し、売上げはその逆割合。社長兼デザイナーとして「開発が追いつかず、ごめんなさい」。

- \* ほぼ内製化へと移行し、現在40台規模。白生地中心から先染を1/3まで増やし、小売レベルの取引先を開拓。現在、100社以上の取引先オフアールと展示会を中心に商売展開する中、将来的な継続を見通して「織機の通年契約も出てきた」。
- \* 帯地代行店として、出機25軒・60台規模の経営。ここ数年は稼働率も良く、織手の高齢化廃業や出入り、技術力の差異はあるが、何とか回せている。内製化への必要性も感じるが、現実を考えると「丹後の出機さんと、一緒に歩んでいきたい」。
- \* 現在40台規模、帯地では珍しい内製化への転換中。5年前の4台2人から、今では20台10人に。織工賃制から台数月額契約等の新取引でリスク回避と人材育成。西陣メーカーと作り方・売り方・将来を考え合い「ウインウインの道筋を」。
- \* 内機・出機15台規模のネクタイ生地メーカー。問屋、縫製メーカー、小売りまでの確固とした取引関係を構築し、クールビズにも耐えている。ストラップ、ショールなどへの積極チャレンジも常に販路が課題、「でも、隙間は狙い続けたい」。
- \* 20台程の出機とともに経営。仕入れ合織婦人服地を主素材に京都地区の染問屋とコラボし、東京のアパレル業者に販売している。今後も、東京中心の流れが続くと見込んでおり、販路拡大など「開発・発展の余地は、まだまだ残されている」。

《第1部 終》

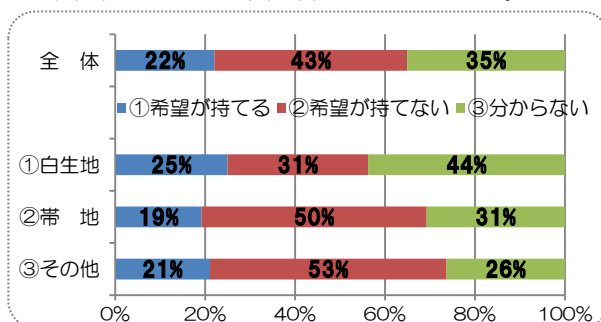
## 《第2部：丹後産地の展望・課題》

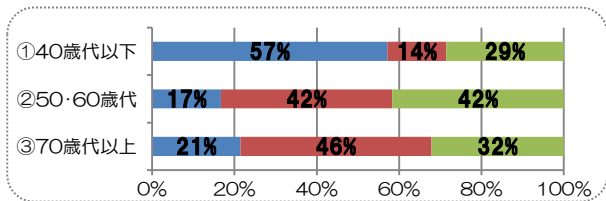
### 【アンケート結果】

#### 1 丹後産地の将来展望

##### =「希望持てる」2割、若い層では6割=

- 「丹後産地の将来展望」について聞いた。全体では、「希望が持てる」は22%にとどまり、「希望が持てない」43%、「分からない」35%となった。
- 生産品目別では、「希望が持てる」は白生地が25%と最も高かったが、顕著な相違は見られなかった。一方、「希望が持てない」は白生地が31%と最も低く、帯地、その他は半数に達した。
- 年代別では、「希望が持てる」が40歳代以下の若い層で6割近くに達した。一方、「希望が持てない」は、40歳代以下14%、50～60歳代42%、70歳代以上46%と年代順に大きくなった。





## 【第2部：補完・考察】＊生産者の声から＊

### =将来につながる丹後産地へ、思いと願い=

- ＊丹後が日本一、世界一のシルク織物産地として、若い世代に引き継がれていくためには、安定した収入の確保が最重要課題。そのためには、丹後の織物が「素晴らしい」「素敵」と思われるような仕掛けづくり、機織り・デザイン・加工の連携と新しい商品づくりへの工夫と発信。そして、常に変化していきながら、各社がきちんと利益を出していく。現実には厳しいが、思いや目標を持ってやらないと、やっていけない。
- ＊これから、日本人がどこまで着物を受け入れるか。団塊の世代の子供たち(40歳前後)は合理的見地からの着物離れ、その子供たちは振袖だけ。そんな中で着物文化がどうなっていくのか、今の需要の7～8割で落ち着けば、そして丹後が25万反生産を維持できれば、世界のちりめん産地として続いていくであろう。
- ＊織物は、複雑に細分化・分業化された工程(準備、製織、染色、仕上、仕立て等)の積み重ね。そして、このすべての段階に後継者の問題があり、川上から川下までの流通の問題もある。各段階のそれぞれが食べられる状態を目指していくのか、それとも自社(自地域)の一貫経営を目指していくのか、流通システムの改革にどのように臨んでいくのか、自然の潮流に委ねるだけでなく、大きなエネルギーも必要。
- ＊一人が持つ織機台数を増やせれば、生産性の向上に大きくつながる。そこで、公的支援機関で織機トラブル発生時の「自動停止システム」の開発ができないか。そのために、支援機関と生産者、研究機関、関連企業等が連携し、「停止必要事例の収集」⇒「停止システムの研究・構築」⇒「生産者への還元」を何とか実現できないか。
- ＊着物が身近なものとして、少しでも定着していくための一提案。「より簡単に着られる」「絹だけど洗える(縮まない、色落ちしない)」については、既にチャレンジ中。これからは、絹の保湿性を生かした「より温かいもの」、絹の通気性を生かした「より涼しいもの」にチャレンジできるよう、機能性を高めた糸の開発を期待したい。
- ＊いずれにしても、ちりめんの風合いと丹後の織技術をもとに、消費者ニーズをつかんで、白生地にも、先染めにも、さらに新しい商品づくりにも、常に反映していくチャレンジしていく姿勢が大切。さらに、観光業界とも連携し、いろいろな体験等を通じて、丹後のシルクを広く世界にアピー

ルできれば。

### =準備工程、機材修理・調達に、不安と要望=

- ＊技術者の高齢化、メーカーの廃業などで、織機調整をはじめ経継ぎ、整経等「準備工程」の伝承、また管巻き機・ダイレクトジャガード・綜統・フィーラー等各種機材の「修理」「調達」が困難になっており、今後の先行きが非常に不安。
- ＊関係団体、支援機関への要望
  - ・各種機材の「修理人リスト」や「機直しマニュアル」のようなものを作ってもらえないか。
  - ・丹後織物工業組合における整経機の共同利用や機料品の問屋(購買)機能の新規対応について、検討をお願いしたい。
  - ・京都府織物・機械金属振興センターでの「織機調整講習」の継続と、「整経・経継ぎ技術習得研修」の新設をお願いしたい。
  - ・準備工程、修理・調達分野の後継者問題やその対応について、生産者、関係団体、公的支援機関が一緒になって検討していくことが必要。
  - ・これらの問題は、全国産地共通の課題。丹後だけで考えるのではなく、他産地とも連携・分担して取り組んだほうが良い。

### =「丹後ちりめん創業300年」への提言=

- ＊オリンピック、大阪万博とのコラボの道を探る。
- ＊観光インバウンドも踏まえ、より多くの組織を巻き込んで斬新な企画でアピールを。
- ＊情報のオープン化(マスコミ、SNS、インターネット、イベント、ショー等の活用)で、とにかく露出を増やすことが大切。

《第2部 終》

### ◆あとがき◆

- ・「アンケート結果」については、その内容をできるだけ客観的に分析することに留意しました。
- ・「補完・考察」については、アンケート自由記述と聞き取り結果によりまとめましたが、異なるご意見やご見解もあるかと思えます。
- ・これからも、誰もが自由に意見を交わし、生産者と関係機関が一緒になって「できること」「やるべきこと」を取捨選択しながら、自信と誇りを持って取り組んでいければと思っています。
- ・生産者の皆様には、アンケート調査及び聞き取り調査にご協力いただき、ありがとうございました。

=====

平成31年(2019)3月

《調査・編集・発行》

公益財団法人京都産業21北部支援センター  
〒627-0004

京都府京丹後市峰山町荒山225

丹後・知恵のものづくりパーク内

TEL : 0772-69-3675 FAX : 0772-69-3880

E-mail : [hokubu@ki21.jp](mailto:hokubu@ki21.jp)

=====